



# Dr. Eckerman の “The Gold Medal for Radiation Protection” 受賞を祝う

遠藤 章  
*Endo Akira*

## 1 はじめに

2012年5月18日、英国グラスゴーで開催された第13回国際放射線防護学会会議 (IRPA13) の閉会式において、スウェーデン王立科学アカデミーから放射線防護のゴールドメダルが Keith F. Eckerman 博士に贈呈されました。

このゴールドメダルは、放射線防護の発展に多大な貢献をされた方の功績を称えるために1962年に設けられました。4年に一度、国際放射線防護委員会 (ICRP) が候補者を推薦し、これを基にアカデミーが受賞者を決定します。これまでに、高橋信次先生 (1985年)、重松逸造先生 (1993年) の日本人2名を含む11名の方がこのゴールドメダルを受賞されています。

この十数年間、博士の身近で仕事をさせてい

ただいた者として、今回の受賞を心からお祝いするとともに、この機会に氏の業績や素顔について紹介したいと思います。

## 2 経歴と業績

Eckerman 博士は、1962年にウィスコンシン大学を卒業し、4年間高校教師を務められた後、大学院に入れ、1972年にノースウェスタン大学大学院で放射線物理分野の博士号を取得されました。アルゴンヌ国立研究所、米国原子力規制委員会を経て、1979年にその後30年間にわたる活躍の場となるオークリッジ国立研究所 (ORNL) の線量評価研究グループのリーダーに着任されました。

当時はそのグループのメンバーを中心に編成された ICRP タスクグループ DOCAL (Dose Calculations) により、作業者による放射性核種の摂取限度に関する勧告 ICRP Publication 30 シリーズがまとめられていた時期でした。Eckerman 博士は、その Part 3 から作成に参加されましたが、それをきっかけに ICRP の活動に関わるようになり、1984年に ICRP 第2専門委員会委員と前記の DOCAL の議長に同時に就任されました。DOCAL の議長は2007年まで務められ、その間、ICRP の線量評価法開発の中



Eckerman 博士と著者 (2010年10月に撮影)

核的な役割を担い、数多くの Publication を取りまとめられました。大変よく知られている業績として、MIRD 型ファントムと呼ばれる線量計算に不可欠な人体モデル、放射性核種の体内動態モデルの開発、そしてこれらを用いた公衆の線量評価のための年齢別線量係数の整備が挙げられます。近年の業績としては後述する放射性核種データベースの開発等があり、これらは被ばく線量計算の土台となるものとして、放射線防護や核医学の分野で広く利用されています。

Eckerman 博士は ORNL における活動を通じて、ICRP のみならず米国のエネルギー省、環境保護庁、放射線防護審議会、保健物理学会、核医学会等の規制機関、学協会の活動にも多大な貢献をされました。これらの業績が高く評価され、ゴールドメダルの受賞が決まりました。

### 3 博士との出会い

Eckerman 博士と私のお付き合いは、1999 年 5 月に同氏から手紙をいただいたことから始まりました。手紙の趣旨は、ICRP、米国核医学会が線量計算に使っている放射性核種データの更新を一緒にやろうということでした。当時、ICRP は内部被ばく線量係数を全面改訂するロードマップを作成し、作業を進めていました。この中に 1979 年以来使われていた放射性核種データ ICRP Publication 38 の更新が含まれていましたが、作業には着手されていなかったようです。いただいた手紙は、ロードマップの中で欠けていたパズルのピースを見つけたような心境を伺わせる熱心なお誘いでした。

実際にお会いしたのはそれから 1 年半後、計画を実行に移すために、2001 年 2 月に私が初めて ORNL を訪ねた時でした。3 日間にわたり博士と私は様々なことを話し合い、作業を具体化しました。それまでは、正直この計画を私が完遂できるか、不安と自信が半々でした。しかし、この訪問を通じて、私にとって別次元の偉大な研究者であった Eckerman 博士が、同じ目

標に向かって協力するパートナーになったと感じられたことが大きな自信になりました。その後の私たちの協力は、MIRD 委員会のデータブック、ICRP Publication 107 として結実しました（本誌 2008 年 10 月号「展望」参照）。

### 4 博士の素顔

“生涯研究者であり続けたい”——私に語ってくださった言葉通りに、Eckerman 博士は 70 歳を過ぎた現在も自ら研究に取り組み、ICRP の活動に貢献を続けておられます。また、1970 年代の ORNL における Health Physics 研究の伝統を受け継ぐ方として、ORNL における今後の研究に関する様々な提案をされながら、若手研究者の指導も行っています。

その一方で、23 年間務められた DOCAL の議長を、2007 年にフロリダ大学 Wesley Bolch 教授に託すなど、仕事の量を徐々に減らして、ご自身やご家族との時間を大切に過ごされています。テクニカルライターのお嬢さん、地質学者の息子さんがおられ、グラスゴーにおける授賞式には、息子さんを伴って出席されました。また、4 人のお孫さんをお持ちですが、日本に興味を持っている方がいらっしゃるようで、ホームステイ等で日本へ行かせたいとおっしゃっています。残念なことに、最愛の奥様は 2005 年にお亡くなりになりました。放射性核種データベースの開発作業は、途中 1 年ほど中断した時期がありました。博士が奥様の看病に専念されていたため、私はその出来事を通じて、氏の奥様への深い思いを感じました。

写真が趣味で、アメリカンフットボールチーム Green Bay Packers のファン、ウィスコンシン州の田舎に酪農場を営む Eckerman 博士には、これまでは多忙でできなかったご自身の時間を楽しんでいただきたいと思いつつ、これからも引き続き私たちをご指導くださることを願っています。

（日本原子力研究開発機構）